

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2007～2010

課題番号：19203008

研究課題名(和文) 韓国の保護および併合に関する総合的研究

研究課題名(英文) General Study for Protectorate and Annexation for Korea

研究代表者

森山 茂徳 (MORIYAMA SHIGENORI)

首都大学東京 社会科学部 教授

研究者番号：50107497

研究成果の概要(和文)：

本研究は、日露戦後の大韓帝国の国際的地位が何ゆえ如何に変化したのかを、日韓両国間の研究者ネットワークに基づき、日本、韓国、および関係各国の史料の収集による実証的かつ斬新な視角による総合的研究である。成果は、(1)包括的史料収集によって新たな決定的史料集完成への展望を開き、(2)2010年8月29日に「韓国併合に関する国際的シンポジウム」(非公開)を開催し、(3)この成果を2011年度中に論文集として、史料集と併せて刊行する予定である。

研究成果の概要(英文)：

This study is general study for why and how to change the international position of the Empire of Korea, from Protectorate to annexation by Japan, on the basis of scholars' network between Japan and Korea, and from the positive and original point of view on the basis of inclusive collecting of the historic materials in Japan and Korea, China, and the concerning countries. The outcome is as follows. (1) to prospect of making of the new and final volume of historic materials on the basis of inclusive collection, (2) to hold on the international symposium about 'Annexation for Korea' on august 29 2010 (closed), and (3) to schedule to publish the volume of the outcome of symposium and historic materials by inclusive collection.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	16,400,000	4,920,000	21,320,000
2008年度	11,500,000	3,450,000	14,950,000
2009年度	8,500,000	2,550,000	11,050,000
2010年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
総計	40,200,000	12,060,000	52,260,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：政治史、地域的結合

1. 研究開始当初の背景

これまで、現在でも余り変わらないが、「日韓併合」については、極めて政治的・イデオロギー的の見解が横行し、関係各国の史料収集

に基づいた実証的研究はほとんどなかった。このため、「日韓併合」については、その評価のみが語られ、それも日韓両国の政治的立場を異にする様々な人士による、併合が正当か不当か、併合条約は合法かなどの意見表明

のみがなされてきた(最近の「日韓両国知識人による併合反対声明」をめぐる論争に顕著に表れている)。しかし、近年になって実証的研究が可能となる展望が開けた。それは、ここ数年になって始めて、日本、韓国、中国、西欧の関係各国の史料公開が促進されたこと(ただし、ロシアについては、一時可能となった史料への接近が最近再び困難となった)、また、日韓両国の専門の研究者の交流が活発になったことからであった。幸い、本研究の参加者は関係各国に度々訪れた経験から各国の史料状況に通じており、さらにそれ以上に重要なこととしては、日韓両国の国家的プロジェクトである日韓歴史共同研究委員会(報告書は2期に亘って刊行された)の中核メンバーでもある。しかも、このような経験を踏まえ、予てから従来とは異なる斬新的な研究視角による実証的かつ総合的な研究の必要性を痛感していた。それゆえ、本研究参加者にして始めて、従来とは異なる総合的研究が始めて可能であると考えたのである。この認識は研究を行ってなお一層深く、かつ精緻化された。したがって、この認識が、本研究に参加していない他の研究者にも共有されることを望むものである。

2. 研究の目的

本研究は、日露戦後の大韓帝国の国際的地位が日本の「保護」時代にどのように変化し、何ゆえ日本の韓国「併合」に至ったのかを、日韓両国間の研究者ネットワークを基盤とし、関係各国に残された史料の包括的収集を行い、かつ徹底した事実関係の究明を以下の斬新な視角から行うことで、総合的・体系的に研究したものである。それらは、(1)国際政治的視角から、日韓両国、中国、および西欧列強の相互関係が、韓国を中心に如何に展開したかの具体的な過程の解明、(2)日韓の地域的結合がどのように形成されていったのかの過程、およびその過程における正負の両面を含めた様々な特質の検証、(3)日本の「保護」によって、どのように韓国社会が再編成されていったのかの過程の究明などである。こうした視角によって始めて「併合」の全過程を明らかにすることができた。

3. 研究の方法

(1)これまで本研究の参加者が築き上げてきた日韓両国間の研究者ネットワークを踏まえ、斬新な視角の追究に見合う研究組織を作り、史料収集・研究の基盤とした。日本側では歴史共同研究委員会に参加した専門研究者の参加を得ることができた、また、韓国側からも、とくに当時の大韓帝国の宮中、および財政に関する専門研究者である李栄薫、

および趙英俊の両氏(ともにソウル大学)の参加を得ることができた。さらに、連携研究者として、長田彰文(上智大学、韓米関係研究)、小林玲子(韓国培材大学、間島問題研究)、新城道彦(九州大学、日韓の地域的結合および韓国宮中制度研究)の参加を得て、一層充実した。

(2)日韓両国、中国、およびロシア、アメリカ、イギリス、フランスなど西欧の関係各国に残されながら、未だ活用されていない、主として未刊行史料の包括的収集を行い、それに基づき、「保護」から「併合」に至る過程を、斬新な視角から実証的に確定した。これには、研究参加者が精力的に各国に調査に赴き、可能な限り、入手しうる史料を渉猟することができた。これらの史料については、今後、他の研究者の使用に供すべく、克明な史料集を作成し、刊行したい。

(3)各自の研究の集成として、最終年度である2010年に国際シンポジウムを開催し、徹底的な学術的討論を行い、その成果を論文集として刊行する。この作業はシンポジウムにおける質疑応答を踏まえ、報告をさらに充実することから成り立つ。それゆえ、シンポジウム直後から、この作業に取り組むが、論文集刊行までは若干の時間的猶予を必要とすると考える。なお、論文集刊行とともに、上記のように、史料集も併せて刊行する。

4. 研究成果

(1)成果論議の機会として、韓国から研究協力者である李栄薫および趙英俊の両氏(ともにソウル大学)を招き、2010年8月29日に「日韓併合国際シンポジウム」を首都大学東京晴海キャンパスで非公開の形で開催した。非公開としたのは、本来、主題である「日韓併合」が政治的・イデオロギー的性格をもつため、外部からの干渉を避けるためであった。また、これには、例えば、九州大学の有馬氏など、少数限定ながら日本近代史など隣接他分野の研究者にも参加を呼びかけ、論議に加わってもらった。また、例えば、呉密察氏(台湾成功大学)などの関係各国の専門研究者などにも招待状を発送したが、残念ながら一部の研究者からは諸般の事情によって参加を得られなかった。しかし、いずれにせよ、このことによって、2010年に多くの機関や学会などで開催された「日韓併合」に関する他の会議(例えば、『思想』の「日韓併合」特集号をみよ)とは異なり、財政的側面を含めた朝鮮の当時の対応に関する精緻な研究発表およびそれに対する詳細な質疑応答などにみられるように、徹底的、自由かつ精緻な論議が可能となった。この成果は論文集として2011年に刊行する予定である。

(2) これまで、研究参加者はすでに様々な機会を得て成果の一端を発表しており、また2010年6月19日には「韓国併合」を主題とする東アジア近代史学会大会において、参加者の大半が報告者として研究の一端を報告した。これらも同学会から論文集として刊行されるが、それを踏まえて成果は本研究プロジェクトの論文集に盛り込まれる予定である。

(3) 史料収集を包括的に行った成果を秘匿することなく広く社会に公開し、今後の精緻な研究に資するべく、詳細な年表・地図を含めた決定的な史料集も刊行する予定である。その具体的な内容としては、第一に、数多くの未刊行史料が含まれるとともに、それらへのアクセスに関する詳細な情報を掲載する予定である。また第二に、年表は第1期の日韓歴史共同研究委員会において、本来、報告書に掲載されるべく作成されたものに、新たな知見を加えて完成させる。さらに第三に、地図もこれまでの史料収には加えられていなかったが、当時の歴史環境を周知させるべく、本研究の参加者である日韓両国の研究者の緊密な協力によって、完成度の高いものを掲載する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

① 森山 茂徳 「併合と自治の間—伊藤博文の国際・韓国認識と『保護政治』」 『東アジア近代史』(東アジア近代史学会) 第14号 査読あり 2011年 1~16ps.

② 堀 和生 「東アジアにおける資本主義の形成—日本帝国の歴史的な性格—」 『社会経済史学』(社会経済史学会) 査読あり 第76巻 2011年 27~51ps.

③ 原田 環 「保護条約から併合条約に至る韓国の政治状況」 『東アジア近代史』(東アジア近代史学会) 第14号 査読あり 2011年 17~41ps.

④ 浅野 豊美 「歴史としての日韓国交正常化」 法政大学出版局 査読あり 2011年 (ページ数未定)

⑤ 新城 道彦 (連携研究者) 李王職の編成と長官・次官・事務官の略歴—王公族研究の基礎データ— 『韓国研究センター年報』(九州大学) 第11巻 査読あり 2011年 69~78ps.

⑥ 永島 広紀 「朝鮮総督府学務局による歴史教科書編纂と『国史/朝鮮史』教育」 日韓歴史共同研究委員会『第2期日韓歴史共同研究報告書』 2010年 127~149ps.

⑦ 永島 広紀 「韓国併合史研究資料」第8期(龍溪書舎)の刊行によせて 『図書新聞』第2953号 2010年 6面

⑧ 姜 東局 「大韓帝国における西洋近代国際秩序の理解と春秋・戦国」 吉田忠編『19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究』 査読あり 2010年 215~235ps.

[学会発表] (計10件)

⑦ 新城 道彦 (連携研究者) 「韓国併合と王公族の創設」 第3回奎章閣(ソウル大学)韓国学国際シンポジウム 2010年8月28日 韓国 ソウル大学

① 森山 茂徳 「伊藤博文の『保護政治』」 東アジア近代史学会 第15回大会 2010年6月19日 国士舘大学

② 原田 環 「併合に至る時期の大韓帝国の政治状況—保護条約から併合条約にかけて—」 東アジア近代史学会 第15回大会 2010年6月19日 国士舘大学

③ 永島 広紀 「朝鮮総督府の『旧慣調査』と歴史教科書編纂」 東アジア近代史学会 第15回大会 2010年6月19日 国士舘大学

⑥ 新城 道彦 (連携研究者) 「王公族の創設と日本の対韓政策—『合意的国際条約』としての韓国併合—」 東アジア近代史学会 第15回大会 2010年6月19日 国士舘大学

⑤ 浅野 豊美 「植民地の物質的清算と心理的清算—請求権の法的文脈と政治的解決—」 アジア政経学会 2010年6月12日 京都大学東南アジア研究センター

④ 永島 広紀 「戦時末期における朝鮮軍報道部の映画製作と文芸<統制>の諸相」 九州大学韓国研究センター国際シンポジウム「植民地期および米軍政下の朝鮮映像・画像アーカイブ—映像・画像をいかに語るか」 2009年12月20日 九州大学国際ホール

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森山 茂徳 (MORIYAMA SHIGENORI)
首都大学東京 社会科学部 教授
研究者番号 : 50107497

(2) 研究分担者

浅野 豊美 (ASANO TOYOMI)
中京大学 教養部 教授
研究者番号 : 60308244
原田 環 (HARADA TAMAKI)
県立広島大学 人間学部 教授
研究者番号 : 40228648
堀 和生 (HORI KAZUO)
京都大学 経済学研究科 教授
研究者番号 : 60210201
永島 広紀 (NAGASHIMA HIRONORI)
佐賀大学 文化教育学部 准教授
研究者番号 : 50315181
姜 東局 (KANG DONGKUK)
名古屋大学 法学研究科 准教授
研究者番号 : 80402387

(3) 連携研究者

長田 彰文 (NAGATA AKIHUMI)
上智大学 文学部 教授
研究者番号 : 60244216
新城 道彦 (SHINJYO MICHIHIKO)
九州大学 韓国研究センター 助教
研究者番号 : 40553558

研究協力者

小林 玲子 (KOBAYASHI REIKO)
韓国 培材大学